

| | |
|---------|--------------|
| 氏名(本籍) | 茂木俊伸(愛知県) |
| 学位の種類 | 博士(言語学) |
| 学位記番号 | 博甲第3302号 |
| 学位授与年月日 | 平成16年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 文芸・言語研究科 |
| 学位論文題目 | とりたて詞文の解釈と構造 |

| | | | |
|----|---------|--------|------|
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 湯沢質幸 |
| 副査 | 筑波大学教授 | | 高田誠 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | Ph. D. | 竹沢幸一 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | | 沼田善子 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | | 加賀信広 |

論文の内容の要旨

本研究は、現代日本語における「とりたて詞」について、「さえ」、「しか」、「ばかり」を中心に、それらがどのような統語論的特徴および意味論的特徴を持っているのかを明らかにすること、そして、それらの特徴が、とりたて詞が現れる「とりたて詞文」の解釈にどのように反映されているのかを明らかにすることを目的としたものである。

本研究の基本的な考え方は、とりたて詞文の意味解釈に反映されているとりたて詞の特徴には、一方に、それぞれの語に固有の語彙の意味から分析すべき側面があり、他方には、共通のメカニズムの下に捉えられる統語論的な特徴から分析できる側面があるというものである。

本研究では、前者の意味論的な特徴についてより細かな記述を行いながら、特に、後者の統語論的な側面について中心的に議論を行い、新たな知見を得ることを目指している。その論考の要点は、大きく以下の2点にまとめられる。

まず第一に、とりたて詞文の解釈と統語論的構造との関係についての議論である。すなわち、とりたて詞文から得られる意味解釈ととりたて詞の統語構造上の位置とが対応関係を持っているということを主張し、とりたて詞文に一定の意味解釈がもたらされる理由を統語論的側面から説明していくという論考である。

従来の研究においても、とりたて詞の形式的な側面の特徴として、文末要素との共起関係や分布制限といった現象に基づいて、「呼応」というメカニズムが想定されてきたが、本研究ではこれを、とりたて詞と述部要素が同一の構造レベルで成立させる構造的関係という形に捉えなおしている。

このように考えることで、特に複文におけるとりたて詞の振る舞いについて、先行研究の記述をより予測可能性の高い形で再解釈し、またその振る舞いのあり方の類型化を行っている。さらに、単文における現象についても、この「呼応」の特徴から、とりたて詞文に生じる意味解釈のさまざまなあり方を考えていくことができるようになったということを主張している。

第二に、このような呼応と意味解釈との対応関係について、幅広い範囲の現象を取り上げながら議論を行ったという点が挙げられる。すなわち、従来の共起関係や分布のような、要素の配列として「目に見える」形

の現象だけでなく、主に理論的研究の知見を活かしながら、そのような形では捉えきれない部分を示す現象を、議論の鍵となる現象として提示している。とりわけ、意味と形式、すなわち、とりたて詞文の解釈ととりたて詞の分布位置との間にズレが存在するという問題について、本研究では、従来論じられてきたとりたて詞のフォーカスの拡張に関わる現象に加え、否定文や複合動詞文において、とりたて詞の表面上の分布からは予測されないスコープ解釈が生じるという現象を取り上げ、統語論的な呼応の観点によってこのようなスコープ解釈のあり方を捉えることができるということを示している。

さらに、関連する現象として、二重焦点化構文や、とりたて詞と様態副詞、とりたて詞と否定対極表現との間に見られる語順制限について分析を行い、これらにおいても呼応による分析が適用できるということを論証している。

また、同音語の多義性の問題などを含めた幅広い範囲の現象について、ここで提示したとりたて詞の呼応に基づく分析が、説明もしくは解決のための一定の方向性を与えるものであるということを主張している。

本研究では、このような形で、とりたて詞に見られる形式上および意味解釈上のさまざまな現象、さらには品詞論的な問題に関わる現象について、新たな事実や分析の手段を提示しつつ、また、先行研究の記述を再検討しつつ、詳細な記述を行っている。

本研究は、序章・終章を含めて九つの章で構成されている。

第1章「とりたて詞の基本的特徴」及び第2章「とりたて詞と文の階層構造」、第3章「とりたて詞の呼応をめぐる」では、本研究の総論として、考察の対象と問題の中心となる点、そして呼応による分析の枠組みを提示し、本研究の意義と全体的な見通しを明らかにしている。

続く第4章「「さえ」の分析」及び第5章「「しか」の分析」、第6章「「ばかり」の分析」では、第3章までの議論に基づき、個々の語について具体的な分析を行っている。各章の前半では、それぞれの語に固有の意味論的特徴について再検討を行い、「さえ」（及び「まで」）の「スケール」、「しか」の「視点」、そして「ばかり」の数量詞的性質について、詳細な記述を与え、さらに、第3章までで提示した枠組みに基づき、これらの語の統語論的特徴を明らかにしている。

審査の結果の要旨

「とりたて詞」をめぐるのは、近年さまざまに研究が積み重ねられてきており、それぞれの語に関する記述、分析も少なからず見られるが、一般言語学的な視点に基づき、統語論、意味論の両面から広範かつ詳細に論じたものは、まだ多くは見られない。そのような中で、本研究は、まず、総論としてこれまでの研究を批判的に捉えつつ「とりたて詞」をめぐる問題を体系的に描き出し、著者の立場を明確に示した上で、統語論、意味論上の問題点を一般言語学的な視点に立って詳細かつ総合的に分析するとともに、個々の「とりたて詞」を分析記述するための方法論を確たるものにしていく点が高く評価される。

さらに、各論において、「さえ」、「しか」、「ばかり」の統語論的振る舞いについて、文の意味解釈という視点を加えた詳細な意味論的分析記述をほどこすことによって、その特徴を描くことに成功しており、その成果は従来の研究を大きく凌いでいる。

ただ、用例の意味的解釈において多少疑問があること、また、「さえ」、「ばかり」、「しか」以外のとりたて詞についての分析がやや乏しいことなどが惜しまれるところであるが、それぞれ決定的な瑕疵ではなく、本論文の価値を低めるものではない。

本研究は、これまでの先行の諸研究を総括し、この分野における今後の研究の指針を与えたとも言えるべきであり、博士（言語学）の学位論文として十分な価値を持つものと評価される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。